

都市研究と基本的人権

1. はじめに
2. システム発展の原理
3. 人間の潜在的機能の急速な顕在化の機構の解釈
4. 基本的人権とは
5. 人権尊重における都市の役割
6. おわりに

半谷高久*

1. はじめに

東京都立大学の開校以来継続的に組織されてきた都政研究会、都市研究委員会が結実して、都市研究センターが発足し、今その16周年を迎えた。現代の最も典型的な都市である東京に設置された都立大学は世界の都市研究の中心であるべき宿命と同時にその義務をもつであろう。ここにセンターの今後の一層の発展について私の希望を述べる機会が与えられたことを深く感謝する。一言で言えば、私は基本的人権との係わりあいを視点の中心に据えた都市研究の発展を特に期待している。

私は本来の専攻である社会地球化学の立場から都市研究に足を踏み入れたのであるが、地球の歴史は人間の活動を含めて、後述するように、システム発展の原理の展開として解釈できている。そして都市を地球システムの発展の過程で誕生した一つの社会システムとして位置づけ、その本質はそれぞれの時代において、基本的人権が最大限に尊重される場の機能をもつことであると解釈している。

以下私がなぜ上記の期待を抱くかの根拠を説明したいと思う。

2. システム発展の原理

システム発展の原理とは、「システムはそのもつ潜在的機能の顕在化に向けて発展する」と言い表わせる。現実にはその原理の展開により時の経過と共に、より複雑な構造、より多様な機能をもつシステムが出現してゆく。

* 東京都立大学名誉教授

2. 1 システムとサブシステム

システムは日常的に使用される言葉であるが、はじめに私の解釈を述べておく。システムは抽象概念である。システムはある「まとまり」であるとあいまいに表現するしかない。議論をする場合は、何をもち「まとまり」とするかを具体的に決めなければならない。たとえば人間の身体を一つのシステムとして設定するとき、頭髪にたまる「ふけ」は身体の一部なのか外界かは議論する人が定義するしかない。無条件には決まらない。サブシステムはあるシステムの部分を構成する「まとまり」である。何をサブシステムとするかは議論する人が設定しなければならない。たとえば、人体を構成する頭脳、心臓、手足などは人体のサブシステムである。また人体は原子から構成されるとの立場からは、種々の原子は人体のサブシステムと見做せる。

2. 2 システムのもつ機能と媒体システム

システムが成し得ることがシステムのもつ機能（能力と表現してもよい）である。たとえば、時計は時間を計ることができる。これは時計の機能である。人間はものを食べること、考えること、愛することができる。それらは人間の機能である。しかし、それらの機能はどんな場合でも発揮できるわけではない。システムを取り巻く媒体システムの条件が整っていないなければならない。たとえば、精密なコンピューターも電力が安定に供給されない地域ではなんの働きもしない。人間も空気がなければ生きられない。一般的に言うならば、システムのもつ機能はそのシステムを維持する媒体システムの条件と組みあわせて発揮される。したがって、媒体条件のすべてを知らなければシステムの機能のすべてを知ることはできない。しかし、現実に存在する媒体システムの条件は可能な条件の一部である。したがって現実のシステムが発揮する機能は、システムがもつ潜在的機能の一部が顕在化したものであるに過ぎない。後述するがこの認識が基本的人権を論じるときの基礎概念である。

2. 3 自然の歴史の解釈

現代の自然科学は、科学的に地球、宇宙の歴史を描き出している。細部の機構は別として、本筋においてその描写に間違いがないとすれば、それらの過程はシステム発展の原理の展開であると私は解釈している。

構造をもたない始原宇宙システムから時間の経過と共に物質、エネルギー、空間が生成し、それらが組みあわせて、原子、分子、銀河系、惑星系系、種々の天体が形成された。地球もその一つである。それは宇宙システムが潜在的にもつ機能の発現の一形態として解釈できる。地球システムも太陽系という媒体システムに取り囲まれて、時間の経過と共に生物を人間を生みだした。この歴史も地球のもつ潜在的機能の顕在化の一形態と解釈できる。

しかし、真偽は知らないが、地球も何時かは膨張する太陽に取り囲まれて滅亡するとも言われる。その際は地球のもつ潜在的機能の一部は発揮されないまま、地球は消滅する。システム発展の原理というのは、システムの発展の方向性を示すもので、特定のシステムについて、それがもつ潜在的機能が永久に継続的に顕在化することを保証する原理ではない。

詳しい説明は省略するが、地球上における生物の誕生も、その進化も、人類の誕生も、その機構

はまだ十分解明されていないが、その過程は、生物システムにおけるシステム発展の原理の展開として私は解釈している。

2. 4 人間の歴史の解釈

現代の科学では、生物学上人類として位置づけられる人類が地球にはじめて出現したのは数百万年以前のことと言われている。現在の地球に生きるホモサピエンスは、その祖先から枝分かれした種であろう。地球上の大部分の人間の生活は、徐々に変化してきたが、特に最近大きな変化を遂げた。一方他の生物の生態は、その種の誕生以来本質的な変化は見られないであろう。ホモサピエンスは生物学的構造がほとんど不変であるにもかかわらず、短い時日の経過で、そのもつ潜在的機能を著しく顕在化させた。

昔は石器しかもたなかった人間は今では種々の道具を製作している。またそれらを使用して、自然についての認識を深め、また種々の社会制度をつくり、運営してきた。それらすべては人間の歴史におけるシステム発展の原理の展開と私は解釈している。

3. 人間の潜在的機能の急速な顕在化の機構の解釈

3. 1 遺伝子の変化の可能性の否定

生物の進化を肯定すれば、人間の遺伝子も急速に変化し、それが急速な人間の機能の発展をもたらしたとの解釈も理論的には可能かも知れない。嘗てフランスの哲学者人類学者の Levy Bruhl (1857—1939) はいわゆる未開人の思考形態が文明人のそれと異なると解釈し、彼はその理由を現代流に言えば、当初は両者における遺伝子の構造の差に求めたと解される。しかし、後に彼はその主張を撤回した。私も人間の遺伝子のレベルの時の経過による変化が現代の文明社会を生みだした原因であるとの解釈には賛成しない。一万年以前の人間も現代人と本質的には同じレベル遺伝子を持ち、もし現代社会の環境で生活すれば現代人と区別のつかない全く同じ生活を営むであろう。

3. 2 媒体システムの変化の役割

地球における自然環境の条件は各地で多様であるが、ここ1万年で急速な変化を生じたとは考えられない。一方、媒体システムにおける人為的な条件は著しく変化した。その典型は道具や情報の蓄積である。人間は祖先の造った道具を遺産として受取り、さらにそれを進歩させて現代に見られるような多種多様な道具を出現させた。それらによって人間は持つ潜在的機能を広く顕在化させた。また人間は後の時代になるほど多くの情報を蓄積している。経験や知識は文字やフロッピーあるいは社会制度、製作物として蓄積保存され、後世に受け渡される。人間の住む媒体はますます多様な条件を具備することになる。コンピュータの機能にたとえれば、人間という生物学的構造のハードな部分がたとえ不変であっても、情報の蓄積という新しいソフトの出現によってその機能は飛躍的に多種多様化する。

人間は自己の意志に沿って、媒体システムの継続的変化を可能にする機能をもつ。このことが、人間の持つ潜在的機能を広く顕在化させる本質的な因子の一つであろう。

3. 3 個人の機能と媒体の変化の相互的發展

科学技術の發展、社会制度の發展は、個人の行動の組織的な積み重ねで生まれたものであり、まさしく個人を取り巻く媒体システムの変化に該当する。この媒体システムの変化が、個人の機能の促進をもたらし、それが次には媒体の変化を多種多様化する。この相互的發展が、人類社会の急速な發展をもたらした本質的な機構と解釈できよう。

3. 4 多様な文化、文明の形態が共存する理由の解釈

ごく抽象的に言うならば、人間が現実に發揮する機能は、有する潜在的機能のごく一部に限られることがその理由であると私は解釈している。本来ならばもっと深く論ずべきであろうが、中途半端な議論では、かえって私の真意が誤解される恐れが多分があるので本稿では割愛する。

4. 基本的人権とは

4. 1 システム發展の原理から見た基本的人権

4. 1. 1 人間らしく生きる権利

人間は人間である以上人間らしく生きることを求める。基本的人権は一般に「人間が誰でも生まれながらにして持つ権利」と抽象的に表現される。生まれながらにして持つ権利とは、人間として生まれたからには人間らしく生きるということであろう。しかし、それ以上については従来必ずしも明確な説明がなされていないのではあるまいか？

4. 1. 2 基本的人権の尊重とは

私は一歩進めて、システム發展の原理を基礎にして、人間個人というシステムがもつ潜在的機能をでき得る限り広く顕在化させる権利が基本的人権であると解釈したい。したがって基本的人権の尊重とはその権利が發揮される媒体システムの条件を整備することになる。ただし、その条件の具体的内容は個人の在り方とその個人を取り巻く媒体システムの在り方によって左右される。

人間は機能を發揮するための最も基本的条件は生物として生きるられる条件、すなわち、生命の維持、食料、水、空気、住居などを確保することである。どのような社会制度を採用するにせよ、それらの条件を整えることが基本的人権の尊重の具体的な第一条件である。また人間らしい機能の基本は自分で考えることにあるとすれば、思想の自由はあらゆる社会制度に通用する基本的人権の尊重の具体的内容である。

人間が形成する過去から現在にわたる多種多様な社会においては、それぞれについて、種々の人権尊重の具体的条件が設定されている。その設定の仕方がその社会の發展を左右する。

4. 2 社会の發展における基本的人権の尊重の役割

私は人類社会の發展をもたらす最も本質的な因子は社会を形成する個人の機能の發展であると確信しているが、決して還元論的思考を信奉しているわけではないので、一言それに言及しておく。

4. 2. 1 システムの機能とサブシステムの機能の関係

一般的に言ってシステムの機能はそのサブシステムの機能の和ではなく、次式が成立する。

$$\{\text{システムの機能}\} = \{\text{サブシステムの機能の和}\} = \{\alpha\} - \{\beta\}$$

ここに α はサブシステムになかったが、システムに新たに加わった機能、 β はサブシステムがもっていた機能の中で、失われる機能である。 α および β はサブシステム間の結合状態に依存する機能である（詳細は参考文献1参照）。

無機物についてのその典型的な例はダイヤモンドと石墨の性質の違いである。両者ともそのサブシステムは同じ炭素原子である。そのサブシステムの間での結合の仕方の違いでダイヤモンドにも石墨にもなる。

人間が組織するいわゆる会社においても、それを構成する社員が全く同一人であっても組織の組み方で、会社の業績は異なる。組織の在り方はシステムの機能を大きく左右する。

しかし、人間がサブシステムとして構成するシステムの場合、個々人の結合関係の仕方を決めるのは人間自身である。したがって、その人間がもつ機能がシステムの機能を大きく左右する。その意味で、一般論として人間社会において幅広い機能をもつ個々の人間を育てることがその社会を発展させる原動力となると私は考える。

4. 2. 2 人権尊重から見た個人と社会全体

複数の個人からなるシステムにおいては、複数であることがそれぞれのこの基本的人権の発現を拡大する条件となると同時に、その発現を制約する因子としても作用する。卑近な例で言えば、夫婦からなる家庭は子供を生むという新しい機能を発揮できるが、同時に夫婦であることにより、互いに行動の自由がある程度制約されざるを得ない。

人間社会の設計は個人の人権の尊重を最大限に拡大し、その制約を最小限に押しさえさせることが目標になる。人間は試行錯誤的に種々の形態の社会制度をつくってきた。ジグザグはあるにせよ、長期的に見れば人権尊重の程度の高い社会が生き残ってきたと判断してよいのではあるまいか？

個人の潜在的機能の顕在化が個人の究極の目標であり、社会はそれを可能にする媒体と位置づければ、個の発展と社会全体の発展との両立が論理的に矛盾無く成立する。

5. 人権尊重における都市の役割

5. 1 都市の本質

嘗て、私は畏友大谷幸夫東京大学名誉教授から次の意味のコメント「都市とは貧富の差無く共に生活できる場所である」を受けた。このヒントは私が私なりに都市の本質を解釈する契機となった。私は彼の名言を拡大解釈し、貧富の差も、権力の差も、思想の差異も関係なく、自由に生活できる都市がもっとも都市らしい都市と解釈した。つまり個人の権利が最大限に尊重され、あるいは個人の潜在的能力が最大限に発揮され得る場所が都市であると考えた。

そのような場所のもつ具体的社会指標、物理的形態は、その場所が置かれた自然的条件や社会のもつ文化、科学技術の形態に応じて異なる。したがって、具体的指標や物理的形態によって都市を定義することは無理無益である。その本質は抽象的に表現するのが妥当である。

5. 2 都市の個性

都市システムも人間個人と同様に個性があり、また現実に顕在化している機能は潜在的機能のごく一部でしかない。

従来都市の個性は当然と言えばそれまでだが、都市システムの機能——たとえば経済、行政、学術研究教育、住居などの機能——そのものを基準にして論じられた。しかし、人権尊重の場として都市の機能の特徴づければ、個人のどのような潜在的機能の顕在化を特に尊重する場であるか、またどのような機能の発揮が阻害されるかによって都市の個性が議論されるべきではあるまいか。

6. おわりに

以上の議論は「システム発展の原理」の解釈が崩壊すれば、同時に崩壊する運命にあるが、それは別にして、どのような都市の現象を研究するにせよ、それが住民や来訪者の基本的人権とどんな係わりあいがあるかを追求することは、都市研究に欠かせない視点であると私は考える。

最後に都市研究センターの限りない発展を希求する。

参 考 文 献

半谷高久・秋山紀子：「人・社会・地球」、化学同人、1989初版。